

# 過疎問題とグリーンツーリズム

—鹿児島県の現状と課題—

田 島 康 弘

(2007年10月23日 受理)

Depopulation of Rural Areas and Green Tourism

—The Present Situation and Problems in Kagoshima Prefecture—

TAJIMA Yasuhiro

## 要 約

地方の過疎化が進む中で、これに対する対応策の1つとして出されてきたグリーンツーリズムに注目し、鹿児島県内での取り組みの現状や課題について、薩摩川内市と大口市を具体的な研究対象地域として取り上げ、検討した。

その結果、客観的な条件を中心に考えると、受入側、農家側の受入体制は整っている所も出てきているが、こうした農家がきわめて少ないこと、また、客の側、都会人の側の問題としては、自然志向や田舎暮らしを求める人が増えてきているとは言え、まだまだゆとりのない生活スタイルが強く、これがグリーンツーリズムの進展を妨げる大きな要因であることなどがわかった。

**キーワード：**グリーンツーリズム 過疎化 鹿児島県 農家民宿 農業体験

## 目次

### 第1章 研究目的

#### 第1節 過疎問題とグリーンツーリズム

#### 第2節 グリーンツーリズムの概念

### 第2章 薩摩川内市東郷町における過疎化の進行とグリーンツーリズム

#### 第1節 東郷町における過疎化の進展

#### 第2節 過疎化に対する行政・住民の取り組み

#### 第3節 観光ブドウ園の発展

#### 第4節 グリーンツーリズム

### 第3章 大口市における過疎化の進行と行政、住民の取組み

#### 第1節 過疎化の進展

第2節 過疎化に対する行政の取組み

第3節 大口市の農家民泊体験とグリーンツーリズム

第4節 平出水集落の取組みについて

第4章 結語

## 第1章 研究目的

### 第1節 過疎問題とグリーンツーリズム

人口の減少、若い人々の流出、地方における仕事の少なさ、地方の衰退、本県の農山漁村部ではこうした現実があり、しかもその現状は、時とともに悪化しているようにさえ見える。今年の5月、岐阜で開催された経済地理学会では景気の確かな回復が見られるという報告がなされたが、それは中部地方など日本の一部の地域、特定の産業分野に限られた話なのではなかろうか。報告を聞きながら、南九州ではそんな気配はほとんど感じられないと思ったものである。こうしたいわゆる過疎問題が、現代日本が抱える大きな課題の1つであることは言うまでもないが、これに対する1つの答え、対応策として注目されてきたものがグリーンツーリズムであろう。

日本でグリーンツーリズムが話題にされてからかなりの時間が経過しており<sup>1)</sup>、国の政策としても重視されているせいか、どの地方でも話題にされているようであり<sup>2)</sup>、全国的にもこの模範とされるような事例が、注目されるようになってきている<sup>3)</sup>。しかし本県ではまだまだ始まりかけたところで、ようやく行政が力を入れ始めた状況であると言えよう。

ところで、グリーンツーリズムは過疎問題を解決する有力な手段となり得るのだろうか。また、グリーンツーリズムは鹿児島という地域の風土や条件にあっているのだろうか。

結論的にいえば、この取り組みによって人口減少がストップし、増加に転ずるような状況を生み出すものであるとは、ヨーロッパの状況を考えてみても、とてもそうなるようには思えない。しかしながら、何もしなければますます悪くなる現状の中で、こうした方向に歯止めをかけ、前向きな方向を生み出す取り組みの1つであることは間違いないものと考えられ、したがって、本県におけるグリーンツーリズムの取り組みの現状や実態の検討は、検討するに値する課題であると言えよう。

また、その際、従来過疎対策として取り組まれてきたこととの関連の中でグリーンツーリズムの検討を行うことも大切な視点であろう。農山漁村地域では農林漁業の全般的な衰退傾向の中で、これらの産業の発展を中心とした様々な取り組みがなされてきたのであり、部分的には前進の傾向も見られなくはないからである。

従って本稿では1) 従来の過疎問題に対する取り組みがいかなるものであったかを押さえる。2) こうした取り組みの中で新たに提起されたグリーンツーリズムの現状はどのようなものであり、その成果や課題にはどのようなものであるのかについて検討する。ということになるだろう。

もう1つの課題すなわち、鹿児島の地域性とグリーンツーリズムについては、この視点を意識しつつ、具体的な検討の中で考察を深めていきたいと考える。

### 第2節 グリーンツーリズムの概念

次に、グリーンツーリズムの概念について検討しておきたい。

鹿児島県が採用しているグリーンツーリズムの定義によると、「農山漁村などに長く滞在し、農林漁業体験や地域の自然や文化に触れ、地元の人々との交流を楽しむ旅」としており、「1つの場所に長く滞在し、様々な田舎暮らし体験をする」とも言い換えている<sup>4)</sup>。

すなわち、1つの要素は長く滞在するということであり、もう1つの要素は農林漁業体験を中心とする田舎暮らし体験であると言えよう。ただ、「長く滞在」の長さについて、これを文字どおり「長く」と考えるのは、現実には多くの人が取ることのできる休日の長さや、まとめて取る等の休日の取り方の現状からして、日本ではやや現実的ではないと思われるので、本稿ではこの長さの中味については「宿泊を伴う」という程度に考えることにしたい。

グリーンツーリズムを以上のように考えた時、こうした定義ないしは本来的な姿、に関連した2～3の問題点について指摘しておきたい。

その1つは、自然体験をすればグリーンツーリズムであるとしているケースが、かなり見られることについてである<sup>5)</sup>。農業体験、その土地の自然の中で暮らす人々の生活を支えている産業の体験なしでも良いのか、ということである。また他方では、田植えのような農業体験をグリーンツーリズムの例とする扱いも広まっている<sup>6)</sup>が、この多くは宿泊が伴っていない。今の段階では広く捉えようという気持もわからなくもないが、本来のものとは違うという点を、はっきりさせておく必要があるのではないか。

2番目は、修学旅行等の生徒集団をもっぱら対象とするケースについてである。確かに彼らは農村に宿泊し、また、農業体験も行う。しかしこれは、旅行者と「地元の人々」との本来的な交流なのであろうか。農村の側に現実的なメリット（収入等）がなければ—という側面も解らなくはないが、これが強すぎると、本来的な姿とは違うのではないかと感ぜざるを得ない。

さらに、3番目に、グリーンツーリズムは日本では普及しにくいのではないかという意見があることについても触れておきたい。この意見によると、農家等の受入れ側には1) 受入れる時間的余裕がない、2) 人を泊めるための家の改装意欲や資金がない、3) 客を歓迎する心理がない、とし、また、都市居住者にも農村等に宿泊する気がないとする。しかしながら、こうした意見は日本社会の現状の一面を固定的に捉えたもので、その中で起っている新しい要素には全く注目していない。この逆の例が日本でも生じていることは、グリーンツーリズムの先進例の存在が証明しているのではないか。

以上のグリーンツーリズム概念の整理や検討を踏まえ、本研究では鹿児島県におけるグリーンツーリズムの実態の検討を通して、グリーンツーリズムのあり方や過疎問題への対策について、考

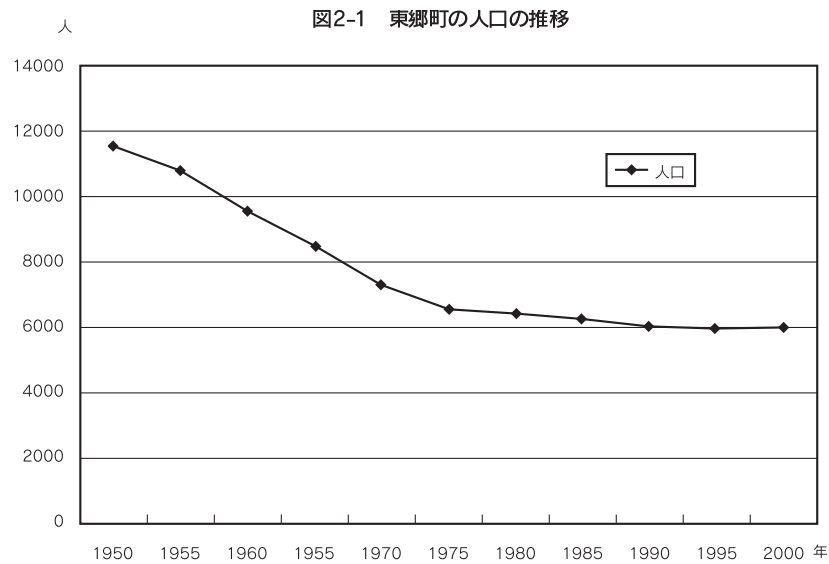
えようとするものである。具体的な検討の対象として、薩摩川内市東郷町と大口市の2つの地域を選択した。両地域には農林漁業が体験できる民宿が存在したことが、選定の大きな理由である。このほかの地域にも農林漁業体験民宿は存在したが、8月の月上旬に体験できる内容がはっきりしていたこと、両地域が比較的近かったこと等も、この両地域の選定をしやすくした理由であった。

## 第2章 薩摩川内市東郷町における過疎化の進行とグリーンツーリズム

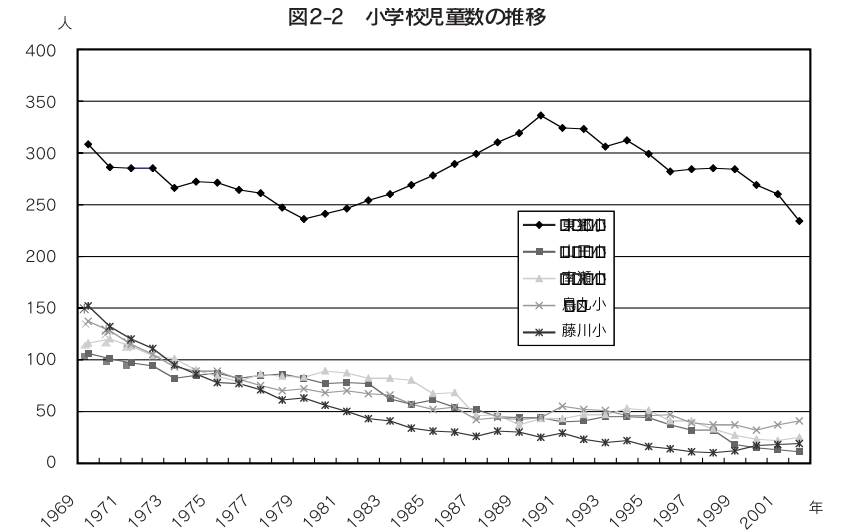
### 第1節 東郷町における過疎化の進展

東郷町は2004年10月、周辺市町村と合併して薩摩川内市となったが、本稿ではもっぱら旧東郷町の範囲のみを、主な研究対象地域として問題にする。第1節では東郷町の過疎化の進展状況について統計を中心に捉えてみたい。

まず、町全体の人口の推移を見ると、1950年には11590人であった人口が、2000年には5978人とほぼ半減しており、この50年間で人口は約半分になっている。ただ、急激に人口が減少した時期は、この前半の1975年ぐらいまでで、これ以降では減少の程度はゆるやかである。(図2-1)



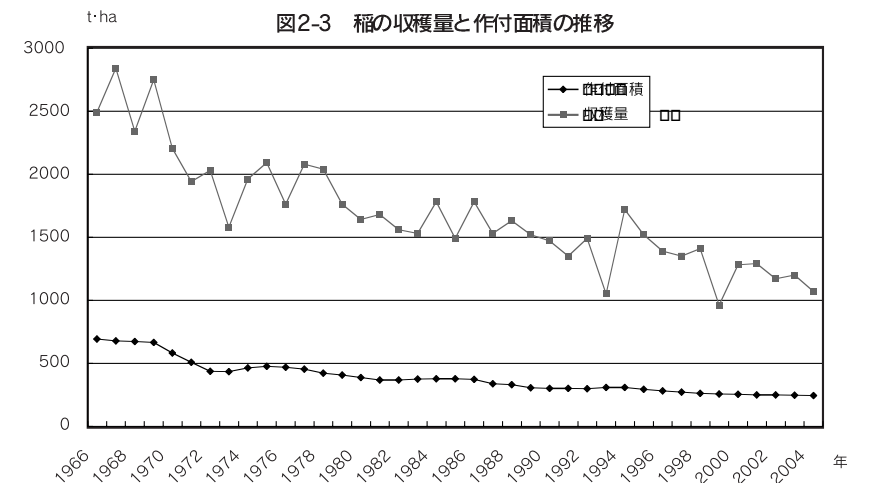
しかしながら、町内を小学校の校区別に分けて、その生徒数の推移をみると、中心部にある東郷小学校を除く他の4校は1975年以降も生徒数の減少を続けており、とくに山田小学校は1975年の87人から2002年には11人にまで減少して、町内周辺部での過疎化はかなり深刻であると言える。(図2-2)



ただ、町の中心部にある東郷小学校の児童数は、1970年代の減少、80年代の増加、90年代の減少をへて現在に至っており、増減はあるものの大きく減少しているとは言えない。東郷町内でも、大きな減少が見られない中心部と減少が顕著な周辺部とが存在していると言えよう。

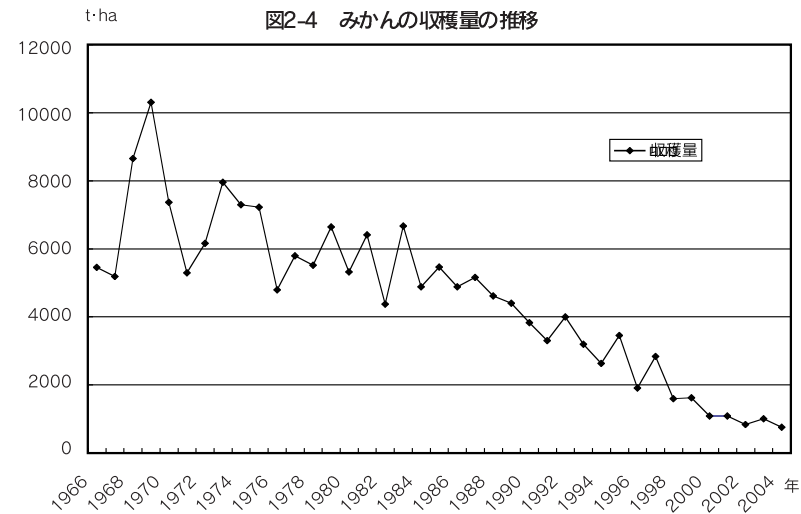
ここで、過疎化を捉える1つの指標として稲の生産に注目したい。過疎化を示すもっとも直接的な指標は人口や児童・生徒数、農家数等であろうが、東郷町におけるもっとも基本的な農産物である稲の生産状況も、過疎化の状況を違った側面から示すように思う。

稲の収穫量は年による差がかなり見られるが、全体として減少の方向に向っており、1960年代後半の3000トン近くから2000年代前半の1000t前後までへと減少している。また、作付面積も700ha近くから250ha以下へと減少した。東郷町の主要農産物は稲のほか畜産と果樹があり、稲だけで成り立っているわけではないが、稲の生産のこうした減少は、農村過疎化の現実を、事実をもって示すものと言えよう。(図2-3)



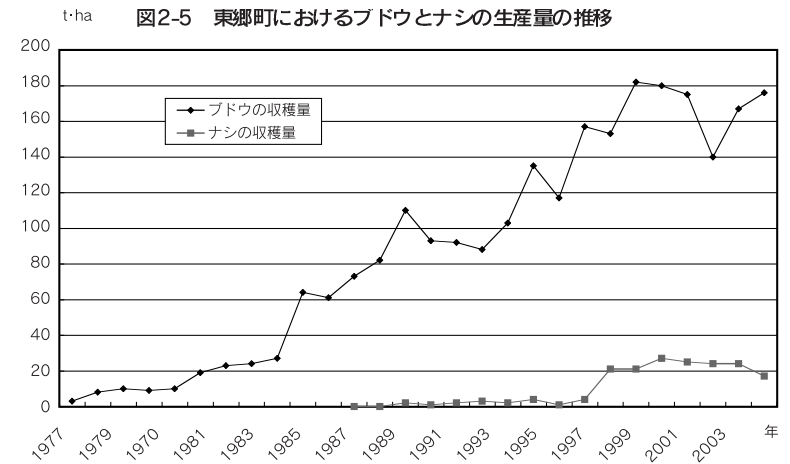
第2節 過疎化に対する行政・住民の取り組み

1973年の「東郷町振興計画書」では「本町の産業の基幹は農業であり、主産物であるみかん、米、畜産のうち、みかんの『東郷みかん』は県特産品として有名である。」と「東郷みかん」を誇らし気に述べていたが、1979年の町の「過疎振興計画書」では「古い歴史をもつ東郷みかんの増産を目指し、新農村建設事業、農業構造改善事業等で規模の拡大を図ってきたが、近年における全国的な生産過剰と価格の暴落にあい、行詰った感がある。」と、みかんの不況について触れており、さらに、1984年の「過疎地域振興計画書」では「近年における全国的な生産過剰と価格の暴落が続いており、今後耕作放棄にもつながるのではないかと心配されている。」と述べ、みかんが「衰退の傾向にある」ことをはっきり指摘している。(図2-4)



しかし、これらの計画書ではみかんに変わる品目については触れていない。当時既にブドウの試作が行われていたが、十分な確信を得るまでには至っていなかったのであろうか。

みかんの価格の暴落は1972年頃からと言われ、これに代わる転換作物としてブドウが選定されたのは1974年である。1975年、17戸の農家が1.8haに巨峰の苗木を定植したが、病気や害虫にやられて5年間は不作続きであった。1981年、雨よけ施設の導入によってようやくこの問題を克服し、これ以後、生産が軌道に乗り始めたのであった<sup>7</sup>。(図2-5)



また、1990年代の後半には、ナシの導入も始まったが、「ナシは台風に弱い」ことが弱点であると言われており<sup>8</sup>、急激に伸びていると言うわけではない。さらに近年は、キンカンやイチゴも導入され、夏季だけでなく年間を通した果物の生産地として「フルーツの里 東郷」をキャッチフレーズに地域づくりを進めている。

第3節 観光ブドウ園の発展

ブドウ生産の発展は東郷町では観光ブドウ園の発展へとつながった。そこで、まず、鹿児島県全体の観光農園について見ておこう。

県のホームページによる観光農園のデータによると、地域的には、東郷町を含む薩摩川内市は、県内で観光農園の最も多い市となっており、66園と県全体の3分の1以上(34.2%)を占めている。次いで、さつま町、霧島市、日置市と続き、以上で県全体の3分の2以上(67.4%)を占める。(表2-1)

表2-1 鹿児島県の観光農園

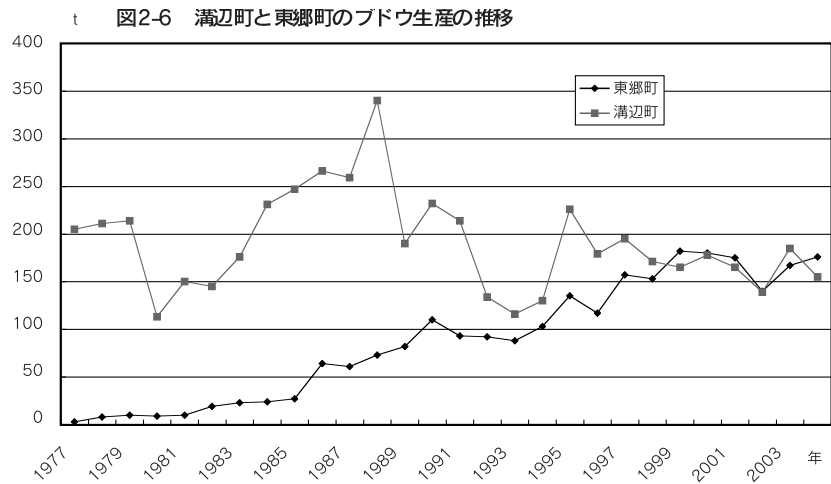
	ブドウ	ナシ	ミカン	イチゴ	カキ	キンカン	サツマ	その他	計	割合%
薩摩川内市	61	14	3	2					66	34.2
さつま町	9	13	4	1	1	6		1	29	15.0
霧島市	17	13		2	5			5	21	10.9
日置市	9		6	1					14	7.3
指宿市	1		1	2				5	8	4.1
鹿児島市	2		4				2	2	7	3.6
いちき串木野市	1		3	2					6	3.1
出水市	4		2						6	3.1
南さつま市	3			1					4	2.1
大口市		2						2	4	2.1
鹿屋市			2	2			1	6	4	2.1
肝属町	3								3	1.6
その他	9	2	2	3			3	11	21	10.9
計	119	44	27	16	6	6	6	30	193	100.0
割合%	61.7	22.8	14.0	8.3	3.1	3.1	3.1	15.5		

注1 サツマはサツマイモのことである。  
 注2 1経営体で2品目以上の場合はすべてを記載した。従って、品目の合計は経営体総数を上回る。  
 注3 品目のその他は、マンゴーが3カ所、クリ、ブルーベリー、落花生、熱帯果樹、メロン、スイカ、トマト、パレイシヨ、野菜がそれぞれ2カ所などである。

また、県全体では、観光農園は薩摩半島の部分に多く存在し、とくに薩摩川内市と、隣接するさつま町の1市1町の部分に集中している (49.2%)。もう1つの中心が霧島市であるとも言えるかも知れないが、こちらの方は全体の11%とずっと小さい。

観光農園の対象としての種目についてみると、ブドウが6割以上と最も多く、次いで、ナシ22.8%、ミカン14.0%、イチゴ8.3%、の順であり、カキ、キンカン、サツマイモの3つがこれに続いている。

かつては鹿児島県における観光ブドウ園と言えば溝辺が中心であった。そこで、溝辺町と東郷町のブドウ生産を比較してみると、溝辺の変動の激しさおよび停滞ないしは減少傾向と、東郷の着実な伸びが読み取れる。この違いは何によるものであろうか。(図2-6)



次に、薩摩川内市の中を旧町別に見ると、もっぱら東郷町に集中していることがわかる。(表2-2)

表2-2 薩摩川内市の観光農園

	ブドウ	ナシ	ミカン	イチゴ	計	割合%
東郷町	46	8	3	1	47	71.2
祁答院町	8	6			11	16.7
樋脇町	6			1	7	10.6
川内市	1				1	1.5
計	61	14	3	2	66	100.0

そこで、東郷町のデータにより、町内観光農園の実態を見ると、地域的には中心地区の斧淵と山間部の山田に多く集中し、経営規模の平均では山田が最も大きく、斧淵がこれに次いでいる。(表2-3)

表2-3 東郷町の観光農園

	農園数	総面積	面積/戸
斧淵	18	6.80	0.38
南瀬	5	1.21	0.24
山田	11	5.62	0.51
鳥丸	4	1.23	0.31
藤川	3	0.72	0.24
計	41	15.58	0.38

注 斧淵の3戸と山田の2戸は規模不明。総数は46戸である。

また、樹園地面積の規模の大きい順に上位10位までの経営体(農家)の内容を見ると、最大は1.7haであり、この表のほとんどの経営体がブドウだけでなく、ミカンやナシをあわせて経営していることがわかる。11位以下の経営体の中にも、ブドウの他にナシを経営するものが2、イチゴのみが1、存在するが、残りの30余の経営体はすべてブドウのみである。小規模経営体はブドウのみであることが明らかとなった。(表2-4)

表2-4 規模の大きな農家の経営内容

番号	名前	面積ha	種目
1	A	1.70	巨峰、ミカン
2	B	1.10	巨峰、ナシ
3	C	1.00	巨峰、ナシ
4	D	0.70	巨峰、ミカン
5	E	0.65	巨峰、ナシ、ミカン
6	F	0.60	巨峰、ナシ
7	G	0.58	巨峰、ナシ
8	H	0.50	巨峰、ナシ
9	I	0.50	巨峰
10	J	0.49	巨峰

現在のブドウの販売・出荷は宅配が7割で最も多く、次いで観光農園でのブドウ狩りが2割、JA共販が1割となっており、販路では宅配が最も重要である。この宅配は口コミで少しずつ「質の良さ、味の良さ」が広がっていった結果であると言う<sup>9)</sup>。販路拡大の努力は常になされてきたが、近年も次のようなことを行っている。1) チラシの作成、ブドウ狩り案内看板の設置、2) 顧客管理、収穫間近のダイレクトメール(以上各農家)、3) ハサミ入れ式—初収穫の時に報道機関を呼んでのPR、4) ブドウキャンペーン(鹿児島中央駅や川内駅で)(以上ブドウ部会)

以上見たように、東郷町では過疎化の進展やミカンの不況の中で新たな産業の振興に努めて来ており、一定の成果を収めてきていると言えよう。

#### 第4節 グリーンツーリズム

第1章で検討したように、グリーンツーリズムの概念を農林漁業体験と宿泊という2つの要素で捉えたとすると、鹿児島県でのグリーンツーリズムの現状はどのようなのだろうか。

まず、農林漁業体験だけについてみると、県内で農林漁業を体験できる施設は、県のホームページによれば26カ所となっており、その内容は田植え、稲刈り、茶の手もみ、そば打ちなど様々であるが、全体的には子どもを対象としたものが多いようである。しかし、これらは宿泊を伴ってはいない。

もう1つの宿泊を伴う体験民宿の方は、16（離島を除くと11）と必ずしも少ない数ではないが、地域的に分散しており、また内容も様々である<sup>10</sup>。今回宿泊した薩摩川内市と大口市のものはこの中の2つであるが、両市にも体験民宿は1つずつしかなく、県全体として、まだ、試行的、実験的段階にあると言えよう。

薩摩川内市の説明によると、グリーンツーリズムに対する取組みを強めるため、昨年観光課に所管換えし、大分県などの先進地の視察を行った。今年はグリーンツーリズムのための協議会をつくる予定で、そのための準備会を発足させた段階である。宿泊となると客室面積、台所、トイレ、食べ物など難しい規制もあり、こうしたことをクリアする体制づくりを進めている。市内にただ1軒だけ存在する農家民宿は3年前に開業したものだが、これは、台所、トイレ、浄化槽に関する保健所の許可などすべて本人が自力でクリアしたものである、とのことだった。

自然を求め、ここにやってくる客については、福岡の人は熊本止まりでここまでは来ない。従って、鹿児島市あたりの人が中心となるだろうが、新幹線の開通で状況は変わってくるかも知れない。期待しているとのことだ。

次に、我々が宿泊し、農作業体験を行った体験民宿であるK農家について述べよう。我々5人はここに2泊し、朝のブドウの収穫、午前中の袋入れ作業、夕方の公設市場への運搬などを、行ったり、見学したりした。こうした作業などを通して、ブドウを宝のようにていねいに扱う農家の人の気持の一端に触れることが出来たような気がした。食事は基本的に自炊であったが、野菜などの食材や、たまご焼きなど料理の一部の提供など、全面的な補助があった。デザートとしてのブドウも食べ放題であった。我々が宿泊したのは母屋のとなりの離れであったが、部屋や台所、トイレ、風呂場などすべてとてもきれいだった。トイレは水洗であり、外にも水洗のトイレがあった。

以下に、Kさんが体験民宿を始めることになった動機、およびその後の経過について要約する。

もともと国際交流に関心があった彼女は1991年県から派遣されてドイツの農家に民泊した経験をもつ。帰国後、民宿をやりたいと言う報告を書いたが、5年間ほどは台風の連続でナシが落ちたりして、資金的に余裕がなかった。1999年民宿のための研修を東京で受け、「やっぱりやらなけりゃいかん」と思い、2003年の夏に決心して農協から資金を借り、保健所、消防署などの許可の手続きなども全部1人でやって、2004年6月に建物が完成し、開業にこぎつけた。

最初は大隅の友人、それから薩摩ファームレディークラブの人達などが宿泊した。その後、視察に来る人は多いが、宿泊までする人は少ない。今は忘年会などの会場として使ったり、農大生の研修の場としても活用しているということだった。

彼女が体験民宿を開設した理由をまとめると、

- (1) むかし、人から「農家に泊めてください」と言われたことがあったこと。
  - (2) ドイツの農家に泊り、その人とのふれあいが忘れられないこと。
  - (3) ドイツの人は日曜日には教会に行ったりして、農家でもゆったりした生活をしていたことがイメージにあること。
- などとなるだろう。

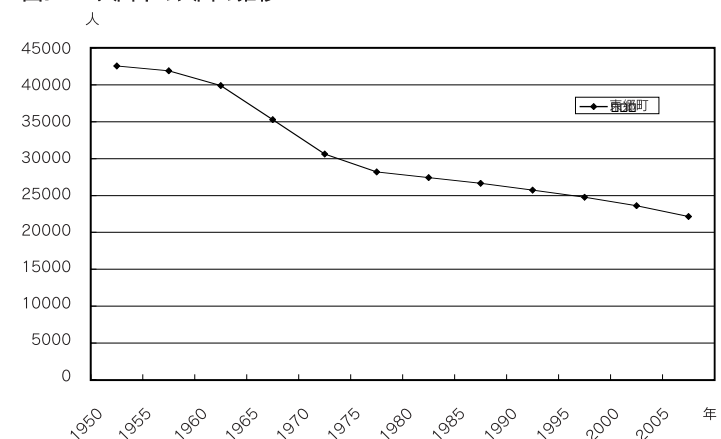
今述べたように、訪問者が多い割には宿泊者が少ないという。この3年間で100人ほどが宿泊したというが、果たしてこのうちのどれだけが自然と農家体験を求めた本来的な客だったであろうか。しかしながら、受入側としての農家の体制の方は、少なくともこのK農家に関しては十分に整備されている、と感じた。課題はもっぱら客の状況の方にあるのではなかろうか。

### 第3章 大口市における過疎化の進行と行政、住民の取組み

#### 第1節 過疎化の進展

大口市も東郷町と同様、ここ50年間に人口をほぼ半減させている。2000年の1950年に対する減少率は東郷町の51.6%に対し、大口市は55.5%で、東郷町ほどではないが、ほぼ同様である。ただ、減少の仕方はやや異なっており、東郷町が1955年から75年にかけて急減し、その後の減少はやや緩くなっているのに対し、大口市の方は1955年から75年のうちとくに1960年から70年の間に急激な減少が見られ、75年以降今日までについても減少傾向が目立つことである。大口市の方が僻地性が強いということであろうか。(図3-1)

図3-1 大口市の人口の推移



児童数の減少はより急激で、1954年の6062人から2006年の1043人へと、約50年間で17.2%にまで減少しており、市内にある11の小学校の中には児童数が11人（羽月北小学校）、12人（山野西小学校）の学校すら存在する。

大口市も、市全体として過疎的な状況が見られ、とくに盆地周辺の山間部で、状況が深刻である

と言えよう。

## 第2節 過疎化に対する行政の取組み

こうした過疎化の進展に対する近年の行政の取組みについてみると、1つは伊佐地区産業活性化協議会の結成があげられよう。これまでの地域振興への取組みでは、農協、商工会、森林組合等がそれぞれ独自に計画をたてて行なわれてきたが、もともと地域は1つであり、もっと連繋して行った方がよいという声が農協の若手職員の中からおこり、2003年（H15）12月この協議会の設立総会が開かれ、農協に事務局を置き、定期的に会議を開き、2004年4月からは、物産展を大阪、福岡、鹿児島等で行ってきた。また、大口市と菱刈町との関係も、商品名に大口や菱刈の名が入っているものはあまりなく、焼酎の伊佐錦、米の伊佐米など多くの商品で伊佐ブランドが使われており、共同で取り組むことが自然であった。

過疎化に対する近年のもう1つの取組みは、厚生労働省の「地域雇用創造推進事業」を活用したもので、経営セミナー、起業家セミナー等を開催し、地域産業の活性化や新しい企業の創出に取り組んできたことである。大口市は県内では初めてこの事業に採用され、その資金でUターン者に対する説明会なども開催され、これらの人達の中から喫茶店、レストラン等を始める起業家も生まれている。Uターン者といってもそのほとんどはUターン者であるが、彼らが定住する際に直面する問題点について触れておくと、1つは住む家の有無であり、もう1つは仕事のことであり、前者では空家がないことはない。後者で農業をする場合、(1) 農地を借りることは出来ても将来自分のものにすることが出来るのか否か、(2) 農業で食べていけるのか、の2点が当面の課題となっているということであった。

次に、グリーンツーリズムにかかわる行政や地域住民の取組みについてみると、まず、大口市内で都市農村交流の先進地区である平出水集落の動きがあげられよう。ここでは、1つは10年ほど前から鹿児島市内の人と田植え、稲刈りの体験を伴う交流を行っており、収穫された米は体験者が購入している。もう1つは大阪府堺市の住民との交流で、子ども約30人とスタッフが8月下旬大口市で4泊5日し、農家民泊、農作業、キャンプ等を体験するものである。

2番目は建設業者の新分野進出の動きの中に、グリーンツーリズム関連の動きが見られることである。この例としては「大口ダチョウファーム」「ブルーベリーつみとり観光農園」「愛高梅園『昔日の宿』」などの農園経営があり、また、建設業者でサツマイモの生産を始めた者もいる。このうち、「愛高梅園」は宿泊を伴う施設となっており、グリーンツーリズムにもっとも近い施設と言えよう。

3番目は行政が中心となって行っている、国土交通省の「地域づくりインターン事業」である。この事業は3大都市圏の学生や社会人が、派遣希望地で地域の体験プログラムを体験するというもので、大口市はこの受入地域の1つとして今年度5人のインターン生を受入れていた<sup>1)</sup>。彼らは農業、農村生活、農家での宿泊などを体験するので、グリーンツーリズムに近い行動をする。しかし、グリーンツーリズムとは始めから目的が異なっている、という点も押さえておかねばならないだろう。

すなわち、彼らの目的は(1) 農業の現状を知ること、(2) 自分自身の進路を決めるための基礎的体験、として主に考えられているのである。ただ、受入側としてはグリーンツーリズムとほぼ同様の対応をすることになるのかも知れない。

以上見たように、大口市でも過疎化に対する取組みやグリーンツーリズムへの取組みが行われており、一定の成果も見られることがわかった。

とくに、グリーンツーリズムに対する取組みをまとめると、平出水集落のように、ある程度交流の経験をしている所もあるが、全体としては他人を自分の家に泊めることなど、今までの生活パターンを変えることに対しては抵抗感をもっており、グリーンツーリズムの普及はまだまだであること。まして、事業として経済的に成り立つまでには至っていないこと。当面はインターン事業を続ける中で、こうした受入側の抵抗感をなくしていくことを目標に置いていることなどである。

## 第3節 大口市の農家民泊体験とグリーンツーリズム

我々は大口市にある体験民泊の「愛高梅園『昔日の宿』」に宿泊し、農業体験も行った。ここは梅の木が700本ほど植えてある面積約5haの梅園であり、その一隅に、加工を行う建物や宿泊施設が存在する。我々が行った体験の1つは樽につけてあった梅を取り出して乾燥台に並べる作業であり、もう1つは梅ノ木の周辺に生えてくる雑草の刈り取りであった。後者は遊園地にあるゴーカートのような車で、一直線に並んだ梅の木の脇をこの車で走るだけで草刈りが出来、楽しいものであったが、前者は熟した梅の皮を破らないようにていねいに扱う必要があり、注意が必要な作業であった。このほか、炊事は自炊であり、御飯はかまどで薪たき、風呂は五衛門風呂と、昔の不便な生活を体験することを特色としていた。

グリーンツーリズムとして考えた時、農業の体験は行なったが、農家という感じがしなかった点が1つ残念なことであった。それは、農家らしき住まいがなかったからかも知れない。昔の生活はあったが農家という環境と結びついてはいなかった。ただ、ここは梅の生産が1つの中心であり、これを基本に据えた上での体験民泊なのだろう。そういう意味では他にない特色があり、他との連繋もあわせて考えれば、ここも生きてくるのかも知れない。

以下、ここの経営者O氏の体験民泊開設の動機を中心とした話をまとめ、氏の考えを把握することに努めたい。

O氏は梅園を始める前は建設業者であった。しかし、1980年代になると工事数が急減し、後半には仕事が尻つぼみになることが目に見えてきたので、新たな分野を模索していた。ちょうどその頃JAが所有地を売り出したので入札したら運良く落札し、とにかく念願だった農地を手に入れることが出来た。1999年のことである。氏は大分出身であり、よそ者が何かしようとする時土地の有無は大きくものを言ったのである。そのあと、この土地をどうするかを考え、和歌山を始め各地の梅の産地を見て回り、梅を植えることにした。

2003年最初の収穫も出来、なんとか軌道に乗り出したので、大口で何か他に活性化する方法はな

いものかと考え、農家民宿や体験観光の方向を模索することとなった。グリーンツーリズムの先進地の幾つかも見学し、2006年2月に農業体験と農家民泊を兼ねた「愛高梅園『昔日の宿』」をオープンさせた。ただ、ここ1つだけではグリーンツーリズムとしては不十分であり、広域的なツーリズムのマップを作って、他と連携して進めないと成功しないと考えている。また、グリーンツーリズムは確かに民間から声をあげるが、その後は行政が引き受けるべきで、先進地は皆行政が引っぱっている、とも氏は感じている。この、民間と行政の関係については、後にもう一度触れるであろう。

最後に、なぜ梅なのかについては、梅は漬けておけば長もちし、少しずつ製品化ができる。すなわち1年を通して仕事ができるということであるが、より根底には、梅は日本の食事に欠かせないものであり「終戦時には握り飯に梅は夢であった」という氏の思いも関係しているようである。

#### 第4節 平出水集落の取組みについて

既に見たように、大口市の中でも平出水集落は過疎化やグリーンツーリズムに対して早くから取り組んでいた先進地であった。そこで、この平出水集落の取組みやその要因について検討しよう。

まず、役所の方から平出水がどのように見えているのか、について触れておくと、次のようになる。

- (1) ここはリーダーの性格からか「おいでおいで」であり、外から来るものを積極的に受入れている。
- (2) 地域ぐるみの実践を行っている。
- (3) 「コミュニティビジネス」のような取組みであり、公民館でもある「いなほ館」を外来者の宿泊施設としても利用している。

次に、リーダーのM氏の話から、この集落の取組みやその要因について整理してみたい。

ここの活動内容については、行政の取組みのところで述べたことと重なるものもあるが、これらも含めて述べる。

1) 平出水は米づくりを基盤とした地域であり、20年ほど前に減反、転作をせまられた時、米農家として将来に不安を覚えたことが、1つのきっかけとなっている。ここから出てきた方向は無化学肥料、減農薬の有機農業であり、生産者と消費者の顔がつながるやり方であった。その後、産地間競争も激化する中で、米づくりのあるべき姿は、(1) 基本的には自給自足を確立する、(2) 安全で、おいしく質の良い「売れる米づくり」を目指すという方向であり、グリーンコープとも交流した。また、交流人口を増やせば何らかの影響が出てくるという考えも基本にあった。

2) 10年ほど前から、グリーンツーリズム的な動きが具体化してきた。先進地の視察なども行い<sup>12</sup>、大阪の人と始めた。これは子供30~40人のグループを夏休みに呼び、地域の農家に2人、3人と分けて泊るもので、「子どもが自然に触れて良かった」「ぜんそく、アトピーがなおった」などの良いこともあったが、農家での民泊は1~2泊が限度であり、また、始めの1~2年は赤字であった。3年前に宿泊施設でもある「いなほ館」もでき、経営は改善されてきた。

3) 9年前から「コンサート」を始めた。これは集落の人が大口の街の方へ皆出てしまうので、「こちらへ来いよ」という思いで始めたものである。ここにはスポーツはいろいろあるが、文化的に弱く、これを補おうという思いもある。

4) このほか、前述した国土交通省のインターン生の受入れなど、市の方から頼まれた補助事業も、協力して行っている。

次に、ここ平出水ではなぜこうした活動ができるのか、その要因について考えてみよう。

1) まず、集落では25年ほど前から「夏まつり」を続けてきたことをあげたい。これには地区内外の500人ほどが集まり、地区内約220戸のほとんどが寄付をする<sup>13</sup>。まつりは活動内容の1つでもあるが、要因の方にあげたのは、これを通して、集落が1つになっているという要素の方が大事であると思うからである。これは、先の、市から見た「地域ぐるみの実践」と同質の内容である。

2) 要因の2番目は平出水「かたいえ」である。平出水集落は、まわりからこう言われているという。この「かたいえ」は漢字で書くと、「語会」であり、要するに語り合いのことで、集落の人達がよく話し合っていることを意味する。実はこの語り合いには「飲む」方も伴っているようで、「のんかた」でもあり、踊りが入ることもあると言う。いずれにせよ、語り合いが集落の特色であるとは、何とすばらしいことであろうか。

3) 第3に、公的な制度や資金についてよく調べ、活用していることがあげられよう<sup>14</sup>。地域の活性化のために「制度上くれる金をうまく使え」がリーダーM氏の考えであり、実際にもこれを実行している。「いなほ館」の建設もこうした考えの下に出来たものと言えるようだ。

4) 第4に、すぐれたリーダーの存在という要素も欠かせないだろう。もしかしたら、これが最大の要素かも知れない。よく「まちづくり」がうまく行くには3種類の人間が必要でそれは「わかもの、よそもの、そして、ばかもの」だという。平出水のリーダーである氏は「わかもの」ではないし、都会の生活経験はあるが「よそもの」でもない。とすると残りの「ばかもの」ということになる。しかし、この「ばかもの」は文字どおりのばか者ではもちろんない。とすると、この「ばかもの」の本質は何なのだろうか。それは、「人の目を気にすることなく、自己の信ずる所に向って一生懸命に邁進する姿」<sup>15</sup>なのであろう。そして、まちづくりの場合、これが現実化するためには、その前段階での徹底した議論が前提になっているようにも思う。平出水の場合は前述の「かたいえ」がこれを保障しているのではなかろうか。また、リーダーM氏の自分の本性に忠実であり、純粋でストレートな性格や、若い頃、都会のサービス業の仕事で培われた人間関係に揉まれているという面も、プラス要素として作用しているように思われる。

## 第4章 結語

以上、2つの地域を取り上げ、過疎化の進展とそれに対する行政の取組みとりわけグリーンツーリズムへの取組みを見てきた。過疎化に対しては、人口減少を回復するほどではないにせよ、両町



とも一定の取組みを行い、前進の面もみられた。ここでは主にグリーンツーリズムを中心に、整理をしておきたい。

グリーンツーリズムはヨーロッパで始まった。都市化の進展とともに都市居住者の生活が次第に自然から離れはじめ、こうした事態がさらに進行する中で、都市居住者の中に自然や自然の中の生活、そこに住む人々や文化に対する関心が高まっていったのである。都会で生活していると、その忙しさの中でともすれば忘れがちになるが、そもそも自然志向は、我々人間の本質的な属性なのではなからうか。ヨーロッパでは、こうした都会人が自然に囲まれた農家に滞在し、自然のリズムに沿った生活をする中で、本来の人間性を回復しているのであろう。

ところで、こうした状況は日本ではどうなのだろうか。

まず、都会人の状況を見ると、日本でも基本的に同じ状況があると言えるだろう。ただ、休暇の日数や取り方など心理的なゆとりのなさは、今のところかなり違っている。こうした日本社会のゆとりのなさを解消こそ、グリーンツーリズムのためだけでなく、我々が克服すべき本来的な課題の1つであろう。

また、鹿児島のグリーンツーリズムを考える場合、ターゲットとしての都会人をどこに想定するかも、検討に値するテーマであろう。大口の場合、1つは大阪であり、1つは鹿児島であった。川内の場合は新幹線の開通との関連で、福岡への期待もみられた。

これに関連して、一般に、「日本では都市と農村の距離が近すぎる」と言われることがある。これは、1つには地方都市ではまだ自然が残っていて、自然志向がそれほど強くない、ということなのだろう。しかし、都市に自然が残っているということは、結構なことではなからうか。都会で自然を取り戻すことができれば、それにこしたことはないからである。

他方、農村が都会化し、かつて存在した自然が失われているという意味であるかも知れない。メダカや蟹の減少がその一例となろう。こちらの方は自然の回復、再生が強く求められるであろう。

次に、農村側の状況を見よう。都市化社会が進み、自然志向の人々が多くなってきた場合、日本の農村はそれを受入れる体制が出来ているだろうか。日本各地のグリーンツーリズムの先進例は、これに対応したものと言えるだろう。しかし、鹿児島の場合はどうだろうか。「カゴシマは10年遅れている」<sup>16</sup>と言われるように、反応は鋭くはない。

そこで、鹿児島のグリーンツーリズム発展のための農村側の課題について考えてみよう。本稿ではグリーンツーリズムを宿泊と農業体験の2つの要素で捉えてきたので、ここでもこれに沿って検討しよう。

まず、宿泊に関しては「自分の家に他人を泊めることには抵抗がある」とか「農家で民泊は1～2泊が限度」という声があることを先に見たが、やはり互いにプライバシーが保たれることが求められるであろうし、そのためには、(1) ある程度広い家であるか、(2) 「離れ」の存在、が必要となるだろう。一定の資金力が必要ということであろうか。

もう1つの農業体験の方は、そこでの農作業体験を通して、(1) 自然との触れ合い、(2) その自

然の中で生活する人々との触れ合い、の2つの実現が基本であり、今回の私達の2カ所の体験では、これらは実現できたと思われる。それを列挙すれば、ブドウの収穫、収穫したブドウの袋入れと箱詰め、梅の天日干し、梅園の機械による草刈り等である。

このように見ると、農家側の物質的な問題は一定の資金力の点に絞られてくるように思われる。そして、全体的に見ると都会側のところで指摘した日本の都会人の中にある「心理的なゆとりのなさ」の要素が、鹿児島のグリーンツーリズムにとっても当面する最大の問題となるのかも知れない。現状ではこの要素はまだまだ強いと思われるが、自然志向や田舎暮らしを求める人々も増えてきており、日本社会のこうした変化に対応して、鹿児島でもグリーンツーリズムが定着、普及してくるのではなからうか<sup>17</sup>。

以上の他に、より基本的な問題として農家が自立できること、すなわち農業での自立がグリーンツーリズムの成立には必要ではないかと思う。我々が宿泊した農家も1つはブドウを中心にナシ、ミカン、米を栽培する自立農家であったし、もう1つは5haの農園を持つなかば企業的な「農家」であった。しかし、今の日本の多くの農家は農業だけでは生活できず、その結果農家数はどんどん減少し、農業政策も大規模農家のみを対象とするようになってきている。これでは、グリーンツーリズムの基盤がどんどん削られていくことを意味するであろう。グリーンツーリズムを志向する小規模農家でも生き残れるような、多様で多面的な農業政策が求められるのではなからうか。より基本的には農業や農村の国民的視野から見た多面的な価値を評価した、ヨーロッパで行っているような農業保護政策が求められるのかも知れない。

最後に、今回のグリーンツーリズムの体験を通して感じた行政と地域住民との関係について、多少触れておきたい。東郷町のKさんは、まわりの環境の影響があったとは言え、本人自身の中にグリーンツーリズムに対する強い志向が存在し、それが実現の原動力になっているように思われる。大口のM氏も彼自身の中に、こうあるべきと言う考えや信念があつて、それが彼を動かしている。こうした地域住民の主体的な動きが先ず基本にあり、これを行政がうまく支えた時に、事が現実に進んでいっているように思われる。両者のより一層の協力が求められているのであろう。

## 注

<sup>1</sup> 既に1993年には山崎・小山・大島の「グリーンツーリズム」家の光協会が出版され、また1996年には宮崎猛編著「グリーンツーリズムと日本の農村」農林統計協会、農政ジャーナリストの会編「グリーンツーリズムの胎動」農林統計協会、日本観光協会「農山村リゾートのすすめ」社団法人日本観光協会なども出されていた。

<sup>2</sup> 今年の7月末に訪問した石川県でもグリーンツーリズムに関する様々なパンフレット類が作成され、熱心な取り組みがなされていた。地理教育研究会の大会が金沢市であった際にこれらの情報を入手した。

<sup>3</sup> 九州では熊本県の小国や大分県の湯布院などが進んでいるとされている。

<sup>4</sup> 鹿児島県のホームページによる。

<sup>5</sup> 例えば石川県が発行するパンフレット「いしかわのグリーン・ツーリズムガイド2007」などもグリーンツーリズムをこのように捉えている。

<sup>6</sup> 鹿児島市が発行する「鹿児島市のグリーン・ツーリズムマップ」2006年もこの一例である。

<sup>7</sup> 特集 東郷ぶどう おいしさのひ・み・つ 東郷町広報No.582号 2003年8月

- 8 薩摩川内市東郷支所での聴き取りによる。
- 9 薩摩川内市役所への筆者の質問に対する回答による。
- 10 これも鹿児島県のホームページによる。
- 11 正確には、県際交流地域が受入れ地域であり、これは人吉市、えびの市、湧水町、菱刈町それに大口市の5自治体である。
- 12 大分の湯布院、安心院、熊本の小国などを見て回ったという。
- 13 一口1000円で、27~28万円集まる。
- 14 氏は市議会議員でもある。
- 15 伊佐地区産業活性化協議会の職員、武田寿子氏の言い方、表現である。
- 16 県のある担当者の話である。
- 17 行政等による資金的な援助が必要なことは言うまでもない。

## 謝 辞

本稿作成に当たり、農家民宿の稼木氏、乙津氏には農家民宿に関する個人的なお話を伺った。また、大口の丸田氏には地域振興のリーダーの姿の本質的な事柄について伺うことが出来た。この他、薩摩川内市の榊氏、佐多氏、東郷支所の藺田氏、長谷氏、大口市の橋本氏、伊佐地区産業活性化協議会の中村氏、武田氏には、資料の提供や地域の現実の話等について協力していただいた。以上の方々に厚く御礼申し上げます。